

# 東北蒙旗師範学校及びその学報 『東北蒙旗師範学校専刊』について

娜 荷 芽

はじめに

- 一. 東北蒙旗師範学校の創建
  - 二. 『東北蒙旗師範学校専刊』の発行
  - 三. 『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号の内容
- おわりに

はじめに

中華民国期における中央政府と地方政府の対モンゴル人政策は統一されておらず、特にモンゴル人に対する教育事業は、各地方政権とモンゴル人との交渉の中で行われていた。中華民国期は、北洋軍閥政府期（1912-1927年）と国民政府期とに分けられるが、政府による対モンゴル文化・教育事業が本格的に進められたのは、1930年代に入ってからである。

他方、清末の内モンゴルに近代が訪れたそのときから、モンゴルの政治的指導者たちは近代化を目指して、教育問題に取り組んでいた。中華民国期において、その活動は、モンゴル人有識者やエリートたちによって引き継がれ、漢文化への対抗意識が感じられる。しかし、中華民国時代に弱小民族となったモンゴル人は、独自に強力な文化と教育活動を展開するのが難しく、各地方政権（軍閥）と取引を行わざるを得なかった。東蒙書局や蒙古文化促進会などのモンゴル文化団体の活動及びそれらを発足の母体とする東北蒙旗師範学校は、その典型的な例といえる<sup>1</sup>。

1928年末ごろ、メルセ（1894-1930年代末）は蒙古文化促進会の名義で、東北蒙旗師範学校の建設を張学良と東北政務委員会に提案し、同年7月、東北蒙旗師範学校は瀋陽にて開校された。同校は1930年に、現在まで発見された中華民国期に刊行された最初のモン

---

1 東蒙書局、蒙古文化促進会について娜荷芽論文「中華民国期におけるモンゴル人の文化・教育活動——1912～1932年を中心に——」、中国人民大学国学院『西域歴史語言研究集刊』第九輯、2017年6月、437-449頁をご参照いただきたい。

ゴル語による学報ともいえる *jegün qoyitu-yin mongvul qosivuud-un baysi-yin survavuli-yin darumal* / 『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号（蒙漢合璧）を発行したのである。同創刊号の原本は吉林省図書館に1冊所蔵しているものの<sup>2</sup>、破損や劣化などの原因によって現段階では閲覧不可となっている。

資料などの制限により、『東北蒙旗師範学校専刊』に関する先行研究は数少ない。忒莫勒（トイメル）の研究は先駆的な業績として注目値する。氏は同誌に関する出版情報を記載し<sup>3</sup>、創刊号の一部の文章内容に対して比較的詳しく紹介を行い、一次資料としての価値が高いと評価したのである<sup>4</sup>。ナ・サイジラフは、20世紀における高等学校、大学のモンゴル語学報の歴史的発展の視点から、『東北蒙旗師範学校専刊』は「未見ではあるが最初のモンゴル語による学報であろう」<sup>5</sup>と指摘した。上記の研究は示唆に富むもので本稿でも参考にした。

本稿は、先行研究に依拠しながら、個人所蔵本『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号<sup>6</sup>などの史料を用いて東北蒙旗師範学校の創建、『東北蒙旗師範学校専刊』の発行、同誌の内容などについて考察を行うものである。

## 一. 東北蒙旗師範学校の創建

中華民国期において、モンゴルの民族運動に取り組む動きが活発化する一方、モンゴル知識人を主体とする文化的活動および教育事業が盛んとなった。著名なものとして、最初のモンゴル語出版社蒙文書社（1923年、北京）、モンゴル文化の振興と教育の普及を設立の趣旨とした蒙文学会（1926年、北京）、モンゴル文化の発展および教育の振興を目的とした東蒙書局（1926年、奉天<sup>7</sup>）、東蒙書局を基礎に組織された蒙古文化促進会（1928年、奉天）などを挙げるができる。当時、民族文化の継承やモンゴル全体の振興を趣旨とするこれらのモンゴル人文化・教育団体によるモンゴル語の書籍、教科書の発行が盛

---

2 忒莫勒『建国前内蒙古地方報刊考録』内蒙古自治区図書館、1987年、17頁。

3 前掲忒莫勒『建国前内蒙古地方報刊考録』、16-17頁。

4 忒莫勒「硕果仅存的『東北蒙旗師範学校校刊』創刊号」、内蒙古社会科学院歴史研究所蒙古学信息編集部『蒙古学信息』、2004年第2期、2004年4月、40-42頁。

5 那・賽吉日呼「論我区高校蒙古文学報的起源与發展」（ナ・サイジラフ「内モンゴル自治区高等学校学報の起源及びその發展について」）、『内蒙古自治区高等学校学報研究』内蒙古人民出版社、2010年、2-3頁。

6 内蒙古師範大学 Ü・Šuyar-a（ウ・ソガラー、烏・蘇古拉、1933-2006）教授所蔵本。

7 奉天は現在の中華人民共和国遼寧省の省都瀋陽市に相当する都市。かつて清朝の都として盛京、満洲語でムグデンと呼ばれていたが、1644年北京に都を移すと、奉天府がおかれた。1929年以降瀋陽と改名、1932～1945年まで奉天、1945年から現在にいたるまで瀋陽と称する。

んに行なわれていた。例えば、蒙文書社は多くのモンゴル語書籍を発行する一方、東蒙書局などに対してモンゴル語印刷技術の援助を行っていたのである。

当時、学校の設立など知識人の活発な教育活動も展開されていた。内モンゴルの教育、出版、翻訳関連事業に多くの業績を残したヘーシンゲー（克興額、1889-1950年、東蒙書局の創建者）は、奉天市翻訳書記官を経て、1910年代半ばごろ故郷に戻り、ホルチン左翼前旗公立蒙漢初・高等小学堂を創設し、「柏図書室」を開設した。モンゴル語の活字を作ったテムゲト（特陸格図、1888-1939年、蒙文書社の創建者）は1910年代に蒙蔵学校（北京）の教員をつとめ、その後、南京政府教育部蒙蔵教育司科長兼常任編審を経て、1930年代半ばごろ「満洲国」（以下、便宜上括弧を外す）へ移り興安軍官学校（王爺廟）のモンゴル語教師に就任した。蒙文学会の創建者であるブフヘシグ（梁萃軒、1902-1943年）は1920年代到北京法政大学ロシア語学科を卒業後、蒙蔵学校の教員を経て、1930年代に満洲国興安西省文教科長をつとめた。

同時代において、奉天、チチハル（齊齊哈爾）にモンゴル人の主導による中等教育機関が発足した。具体的にいえば1929年、黒竜江省管轄下にあったイフミヤンガン旗、ドルブド旗、ゴルロス旗、ジャライト旗などの四つのモンゴル旗が共同で出資し、かつ黒竜江省教育庁の援助を受けて、黒竜江蒙旗師範学校（チチハル）が発足した。同1929年、メルセなど「蒙古文化促進会」のメンバーの努力により、東北蒙旗師範学校（瀋陽）が開校された。この二校は後に興安東省扎蘭屯師道学校の母体となるが<sup>8</sup>、創建された当時はいずれも中国の東北地域に位置していた。

モンゴル人によるこれらの活動は、一見成功したかのように見えた。しかし、蒙文書社をはじめ、蒙文学会、東蒙書局などの文化団体は、いずれも資金不足による経営難の問題に直面していた。中華民国時期において、中央政府による支援や資金が獲得できないなど、経済的実力を含めて、モンゴル人文化・教育団体の力が弱いこともあり、自力で十分な活動ができない場合が多かった。ただし、十分な運営費の確保に成功した<sup>9</sup>東北蒙旗師範学校は数少ない成功例の一つであり、その背景にはメルセなどモンゴル人と東北地方政権との協力関係があった。

東蒙書局設立時の主要メンバーは、ヘーシンゲー、ボヤンマンダフ（博彦満都、1894-1980年）、ロルガルジャブ（諾勒格日扎布、1889-1941年）、シューミンガー（寿明阿、1885-1947年）、イエシーハイシュン（業喜海順、1891-1944年）ら地元の有力者（王公貴族）や知識人たちである。同書局の建設資金を得るために、ヘーシンゲーは自家財産を寄

8 娜荷芽「『満洲国』におけるモンゴル人中等教育——興安学院を事例に——」、『日本モンゴル学会紀要』、第42号、6頁。

9 仁欽莫德格「瀋陽東北蒙旗師範学校」、『達斡爾族研究第5輯：郭道甫誕辰100周年學術研究会專輯』第5輯、1996年、174頁。

付したほか、ロルガルジャブ、シューミンガー、イエシーハイシュンら地元有力者の資金援助を得た<sup>10</sup>。

その内、ロルガルジャブは、ヘシグテン旗出身の貴族である。中華民国時代、彼は輔国公に奉ぜられたが、同旗ザサグ（旗長）バトジャヤーとの権力闘争に敗北し、外モンゴルへ向かった。その後、故郷に戻り、奉天督軍署諮議官を経て、1929年にヘシグテン旗ザサグに就任する。満洲国時代には、民政庁庁長（1933）、興安西省省長（1937）などを歴任した<sup>11</sup>。

シューミンガーは、ホルチン右翼後旗出身の貴族である。中華民国時代には、輔国公（1916）、参議院議員、東3省保安総司令部顧問、総統府顧問（1923）、奉天省政府諮議官、蒙古宣撫使署顧問（1924）、蒙辺督辦公署蒙務処長（1931）などを歴任し、満洲国時代には、興安総署理事官（1932）、蒙政部民政司長、興安南省省長、満洲電気会社理事（1942）などを歴任した。1945年に、長春の民報（Arad-un sonin）社社長に任命されたが、戦後逮捕された後、死亡した<sup>12</sup>。

東蒙書局は、「モンゴル民族の文化や教育を発展させることを趣旨」としていた<sup>13</sup>。そのため、同書局は、まず学校用辞書、参考書や教科書の印刷及び発行に力を入れていた。同書局より出版された教科書、とりわけロルガルジャブ編、ヘーシンゲー監修『*Angqan suryaqu ulus-un udq-a* / 初学国文』（全8冊、1928年）<sup>14</sup>は、アルファベットから始まり、発音や文字の習得以外に、モンゴルの地理、歴史などに関する内容を取り入れたため、当時の教育界において高い評価を得ていた。興味深いことは、同教科書のタイトルには、*ulus-un udq-a* / 「国文」という語を使っていたことである。しかし、この場合の「国」が、中華民国を指すのか、モンゴル人の国を指すのか、それとも、単なる単語翻訳レベルの問題なのか、明確ではない。

東蒙書局は、出版社として運営資金不足という問題を抱えながらも、教科書などの印刷発行を遅らせたことはなかった。同書局は、教育関係の教科書など以外に、歴史、文学

---

10 克・莫日根『克興額：一個科爾沁蒙古人』内蒙古教育出版社、2001年、32頁。

11 Ü・Šuyar-a, *Mongyul ündüsüten-ü orčin üy-e-ün uran jokiyal-un teüke*, öbür mongyul-un yeke suryaqu-un keblel-ün qoriy-a, 1987, 393-394（烏・蘇古拉、『蒙古族現代文学史』内蒙古大学出版社、1987年、393-394頁）。

12 広川佐保『蒙地奉上一満州国の土地政策』汲古書院、2005年、235頁。

13 前掲 Ü・Šuyar-a, *Mongyul ündüsüten-ü orčin üy-e-ün uran jokiyal-un teüke*, 395頁。

14 Rolyarjab, Kesingge, *Angqan suryaqu ulus-un udq-a*, 1928-1931 ; ( Erdenitovtaqu, *Mongyul ündüsüten-ü suryan kümüjil-ün biçig matwriyal-un emkidgel*, öbür mongyul-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a, 1983年、41-302頁（ロルガルジャブ編、ヘーシンゲー監修、「初学国文」全8冊中1、3、4、5、6冊、1928～1931年；額爾敦陶克陶『蒙古族教育文献資料彙編』内蒙古教育出版社、41-302頁）。

関係の書籍を多数出版した<sup>15</sup>。その他、東北籌弁蒙旗事務委員会機関誌である『蒙旗旬刊』もここで印刷されていた<sup>16</sup>。

一方、東蒙書局は、1920年代から1932年まで、奉天・瀋陽のモンゴル人たちの活動センター的役割を果たしていた。当時、学生、教師、労働者、知識人や僧侶たちが東蒙書局を訪れ、意見交換をしていたと言われている<sup>17</sup>。

そして、1928年に、メルセ及び東蒙書局の主なメンバーを中心に、蒙古文化促進会が組織された。メルセは、フルンボイル（呼倫貝爾）のジャラムタイ（札拉木台）に生まれたダゴール・モンゴル人<sup>18</sup>で、フルンボイルと内モンゴルにおける政治運動の指導者として、また、教育者として活躍していた。メルセは、政治家ではあったが、政治活動と並んで、教育活動を重視していたのである。彼は、学校教育を通じて、青年たちの意識改造をおこない、さらに漢語で書いた著作を介して、漢人の有識者に、モンゴル人の立場を訴えようとしていた<sup>19</sup>。メルセの漢語で書いた著作は、『庫倫遊記』（出版地未記載、1923年）、『蒙古問題』（元書名『黃禍之復活』、出版地未記載、1923年2月）、『新蒙古』（出版地未記載、1923年11月）、『内蒙古新青年』（同上）、『蒙古民族自覚運動』（出版地未記載、1924年）『蒙古問題講演録』（瀋陽、東北蒙旗師範学校、1929年）、『呼倫貝爾問題』（上海、大東書局、1931年）の7冊である<sup>20</sup>。

1917年にメルセは、黒龍江省内の学校と北京の専門学校に学んでいた青年たちを組織し、その指導者となって、「地方政治改良」を目的とした「フルンボイル青年会」を組織した。1925年に、外モンゴル、コミンテルンの代表などを迎えて、内モンゴル人民革命党第一次代表大会が張家口にて開かれたが、この時、メルセは秘書長に選ばれた。

1918年に、メルセはハイラルで自家の不動産を校舎とし、フルンボイル蒙旗小学校（私立）を創設し、自ら校長を務めた。1920年に、フルンボイル蒙旗小学校は、メルセの意志によって、フルンボイル副都統公署に属する公立学校に改められ、新たに中学部が増設

---

15 前掲 Ü・Šuyar-a, *Mongyul ündüsüten-ü orčin üy-e-ün uran jokiyal-un teüke*, 345-358 頁。

16 『蒙旗旬刊』東北籌弁蒙旗委員会蒙旗処、1929年1号奥付；前掲 Ü・Šuyar-a, *Mongyul ündüsüten-ü orčin üy-e-ün uran jokiyal-un teüke*, 346 頁。

17 前掲克・莫日根『克興額：一個科爾沁蒙古人』、38 頁。

18 メルセはダゴール（地域によってダウール、ダフルなど様々に呼ばれていた）系モンゴル人である。モンゴル語系のダゴールは、広義のモンゴル系集団であり、1950年代まではモンゴルとみなされ、「ダゴール・モンゴル」とも呼ばれた。1950年代に、中華人民共和国における「民族識別工作」に基づき、ダゴールは『ダゴール民族』として認定された。

19 中見立夫「ナショナリズムからエスノ・ナショナリズムへ—モンゴル人メルセにとっての国家、地域、民族」、毛里和子編『現代中国の構造変動（7）——中華世界：アイデンティティの再編——』東京大学出版会、2001年、128頁。

20 恩和巴図「郭道甫先生和滿文字母的達呼爾文」、前掲『達斡爾族研究第5輯：郭道甫誕辰100周年學術研究会專輯』、140頁；奥登挂『郭道甫文選』内蒙古文化出版社、2009年。

されたが、メルセは引き続き校長を務めた。メルセは、学校の創立ばかりでなく、ダゴール・モンゴル人への教育のために、ラテン文字アルファベットに基づくダゴール語の文字を作ったことでも知られている。

1928年、メルセはコミンテルンの指示により、フルンボイルで暴動を起こしたが、失敗した。その後、張学良はメルセに、使者を派遣して交渉したことがある<sup>21</sup>。それをきっかけに、メルセと東北地方政権の協力関係が始まった。これを背景に、上記の蒙古文化促進会は、奉天在住のモンゴル王公らの支持以外に、張学良や東北政務委員会の協力を得ることにも成功したのである。

このように、1928年10月ごろ、「蒙古文化促進会」が奉天にて創立され、事務室は東蒙書局内に置かれた。蒙古文化促進会の趣旨は、「蒙旗文化を促進し、教育を興し、モンゴル語図書の編纂出版事業を発展させる」ことにあると記された<sup>22</sup>。

その後、1928年末ごろ、メルセは蒙古文化促進会の名義で、東北蒙旗師範学校の建設を張学良と東北政務委員会に提案した。1929年1月、この提案は可決され、東北政務委員会の修正案に基づき、同学校理事会が設置された。理事長に張学良、副理事長に袁金鎧（1870-1947年）、理事にホルチン左翼中旗ザサグ親王のナムジルセレン（1884-?）らが選任された。同年7月、東北蒙旗師範学校は瀋陽にて開校され、メルセが校長、ヘーシンゲーがモンゴル語の教師を兼任した。

東北蒙旗師範学校の趣旨は、「蒙旗における教育人材を育成するとともに、蒙旗文化を促進し、蒙旗振興のための人材養成」を図ることにあった。1929年、全部16条からなる「東北蒙旗師範学校章程」が公布され、募集定員、入学資格、年齢、試験項目、履修年限、履修科目、学費などに関する内容が盛り込まれた<sup>23</sup>。

それによれば、東北蒙旗師範学校の経営費は、遼寧省により支出されていた。師範科（中学校）の他、同校付設の小学校もあった。また、東北政務委員会の招聘による学校理事会が設置され、各旗のモンゴル王公及び遼寧省教育庁庁長が理事を兼任していた。

同校の入学の資格について、応募時17～31歳で、旗公署の推薦を得た者、あるいは自ら志願し、試験に合格した者とし、モンゴル人と漢人学生を半分ずつ募集した。学科は、講習科（2年級）と師範科（2年級）であり、卒業年限はそれぞれ、2年と3年であった。各科生徒を私費生と官費生に分け、官費生の定員を10名とした。師範科の私費生は、制服費を負担する他、宿泊、食事、教材費が全額免除された。

東北蒙旗師範学校の専任及び兼任の教職員に、メルセ（校長）、黄成堉（教務主任、元

---

21 前掲中見立夫「ナショナリズムからエスノ・ナショナリズムへ—モンゴル人メルセにとっての国家、地域、民族」、141頁。

22 前掲克・莫日根『克興額：一個科爾沁蒙古人』、39頁。

23 『蒙旗旬刊』東北籌弁蒙旗委員会蒙旗処、1号、1929年、8頁。

西北籌邊使徐樹錚の幕僚)、金鶴年(訓育主任)、梁啓雄(教育、梁啓超の弟、北京大学卒)、セレンニマー(モンゴル語、東北大学文学部卒)、メルゲンバートル(博物)、ヘーシングー(モンゴル語)、李又聃(心理、論理、北京師範大学卒)、王樹屏(数学、元東北大学教師)、李東白(漢語)、汪宗洛(漢語、東北政務委員会蒙旗処職員)らがいた他、姜熙沈(庶務兼会計主任、瀋陽裕通銀行經理)、張子賡(秘書)や雇員ら数名がいた。その内、李又聃は、また後に、蒙民厚生会が建てた中学校の育成学院において、数学と化学を担当し、教務主任を務めていた。付設小学校には、主任1名、高級班(4~6年次)担当2名、初級班(1~4年次)担当2名、教員2名、雇員1名がいた<sup>24</sup>。

1929年、東北蒙旗師範学校の第2期の学生募集が行われた。その翌年の秋ごろ、メルセの意見に基づき、同校は女子講習科(中学校)、女子家政講習科(民衆教育)をそれぞれ増設した。その後、メルセは、同校の経営規模を拡大させ、講習科を2クラスから3クラスへ増やした<sup>25</sup>。

同校カリキュラムは、中華民国教育部が定めたカリキュラムに基づき、設置されたものである。ただし、中華民国教育部規定カリキュラムの外国語の授業は、モンゴル語に変えられた。このようなカリキュラムを、満洲国時代の国立興安学院カリキュラム<sup>26</sup>と比較すると、興味深い事実が浮かび上がる。それは、(1)中華民国時代、モンゴル語と漢語の授業時数はほぼ同じであったが、モンゴル語は国語としてではなく、外国語や方言として教えられていたこと、(2)満洲国時代、日本語の授業時数はモンゴル語授業時数の約2倍近くであったが、モンゴル語は国語として教えられていたことである。国語は、その国家を代表する言語で、公の性格をになった言語のことを指すのだとすれば<sup>27</sup>、この場合のモンゴル語は政治的につよい意味を持ちあわせたと同時に、モンゴル人の置かれていた政治環境を反映するものでもあった、と考えられる。

1930年ごろ、東北蒙旗師範学校の学生代表団が、瀋陽にて国際音楽祭に参加した。同音楽祭には、ロシア、日本、デンマーク、オーストラリア、イギリス、アメリカ、中国などの8ヶ国の代表団が参加した。東北蒙旗師範学校の学生たちは、「ダナバル」、「ハンデルマー」という二つのモンゴル民謡を歌った<sup>28</sup>。

1931年秋ごろ、東北蒙旗師範学校は1期目の卒業生33名(モンゴル人28名、漢人5名)を送り出した。彼らの進路を見ると、東北政務委員会及び東北蒙旗師範学校附属小学

---

24 娜荷芽「財団法人蒙民厚生会の教育支援事業——育成学院を事例に——」『東北アジア研究』第17号、2013年2月、10頁、15頁；前掲仁欽莫德格「瀋陽東北蒙旗師範学校」、171頁。

25 『盛京時報』、1930年6月16日2面；『盛京時報』、1930年6月19日4面。

26 前掲娜荷芽「『満洲国』におけるモンゴル人中等教育——興安学院を事例に——」、8-9頁。

27 亀井孝・千野栄一・河野六郎『言語学大辞典』第6巻、三省堂、1996年、546頁。

28 *Jegün qoyitu-yin mongyul qosiyuud-un baysi-yin suryayuli-yin darumal*、1930、26(『東北蒙旗師範学校専刊』1930年、26頁)。

校が10名を採用した他、ほぼ全員がそれぞれの希望により、各モンゴル旗の教育、行政機関に就職した<sup>29</sup>。

1931年9月18日に満洲事変が勃発したため、東北蒙旗師範学校は一時的に閉校したが、1932年春、再開校された。その後合併、改名を経て、興安東省ジャラントン師道学校として改組発足した。メルセは、1931年12月にソ連当局により逮捕され、ハバロフスク市でしばらく拘束されたが、自然災害に遭い行方が分からなくなったそうである<sup>30</sup>。

## 二. 『東北蒙旗師範学校専刊』の発行

1930～40年代の内モンゴル地域には中等教育機関二十数校あって、これらの学校には学報や機関誌を発行していた。例えば、興安北省省立第一国民高等学校(略称、海拉爾第一国高、1938年)は学報『草丘』を発行していたことを伝える情報がある<sup>31</sup>。蒙古学院は1939年に、*mongvul-un suruly-a-yin qoriyan-u surval negegegsen jilun oi-yin durasqal-un sedkül* / 『蒙古学院成立周年記念専刊』<sup>32</sup>を発行した。興安学院は1942年に日本語とモンゴル語による学報 *Kingvan dabav-a* (『興安嶺』) を発行した<sup>33</sup>。これらの学報は1930年代末以降に刊行されたもので、いずれも1930年に刊行された『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号より比較的遅い時期の学報にあたるため、同誌は現在まで発見された中華民国期に刊行された最初のモンゴル語による学報ともいえる。

『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号の具体的な刊行時間について、『建国前内蒙古地方報刊考録』(1987年版)に1930年11月30日と記す<sup>34</sup>。後述するように、同誌創刊号の「ニュース」欄目<sup>35</sup>に、「本校歌詠団参加国際音楽会」を題目とする記事がある。同記事によれば、1930年11月29日～同11月30日の間、東北蒙旗師範学校学生代表団は瀋陽に開催された国際音楽祭に参加したのである。この情報に基づき同誌創刊号は、1930年12月に刊行されたと推測できよう。これについて、忒莫勒は後の研究に1930年12月であろうと訂正

---

29 『蒙蔵週報』、1931年、78頁；内蒙古教育史志資料編集委員会『内蒙古教育史志資料2』内蒙古大学出版社、1995年、485頁。

30 2013年9月、内モンゴル大学において、東京外国語大学二木博史教授及び筆者のメルセ遺族に対するインタビューによる。

31 蘇日嘎拉図『呼倫貝爾民族教育史略』海拉爾：民族出版社、2001年、111頁。

32 *Mongvul-un surul-g-a-yin qoriy-a*, *mongvul-un surul-g-a-yin qoriyan-u surval negegegsen jilun oi-yin durasqal-un sedkül* / 『蒙古学院成立周年記念専刊』、1939年。

33 *Ulus-un bayivuluvsan kingvan survavuli-yin qoriyan-u surval-un nöküd-ün ulus-tur qarivulqu bülgüm*, *Kingvan dabav-a*, 1942年；娜荷芽『二十世纪三四十年代内蒙古东部地区文教发展史』、内蒙古人民出版社、2018年10月、102-107頁。

34 前掲忒莫勒『建国前内蒙古地方報刊考録』、17頁。

35 『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号、1930年、漢語26頁；モンゴル語69-70頁。



したのである<sup>36</sup>。

1930年12月に、ハーフォンガー（漢字名滕統文、哈豊阿、1908-1970年）、王紹純（1909- ?）編 *Jegün qoyituki mongyul qosiyuud-un baysi-yin surxavuli-yin darumal* / 『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号が刊行された。同誌の刊行理念は、「学術研究、思想発表のプラットフォーム」、「モンゴル民族の文化を発展させる」ことであった。1932年までに全3期刊行されたとの回想はあるものの<sup>37</sup>、上記創刊号以外に現段階ではいずれかの文献所蔵機関に2号や3号の原本を所蔵しているとの情報は得られていない。忒莫勒「吉日本函訪問録」<sup>38</sup>によれば、同誌の発行者は黄成垞、遼寧萃斌閣紙店による出版物であった。当時、黄成垞は東北蒙旗師範学校の教務主任兼モンゴル語の教員を務めていた。ハーフォンガーは当時、東北蒙旗師範学校学生自治会会長を務めていた。

『東北蒙旗師範学校専刊』誌のサイズはB5、モンゴル語部分は全67頁、漢語部分は全26頁。主な内容は、まず第1欄目に、「発刊の辞」、「創刊の辞」、第2欄目に論説、短文が記された。第3欄目に、詩、訳作、小説の連載欄などが記され、第4欄目にニュースがあった。主要編集者のハーフォンガーは、1929～31年に東北蒙旗師範学校に在学中、同誌の創刊号及び第2号の2期の編集作業を担当した。同創刊号に、ハーフォンガーは「創刊の辞」以外に、短文、評論、訳作、詩（モンゴル語）、エッセイ（漢語）など多くの文章を執筆した。

ハーフォンガーは後に満洲国時代のモンゴル人高官となり、内モンゴルの東部に大きな影響力をもっていた。1931年ごろ、故郷に戻ったハーフォンガーは、内モンゴル人民革命党に入党（1932年）し、「フフ・トグ（青旗）」（1932年）という詩を書いた。その後、「青旗」は歌という形で、モンゴル人の間で広く歌われ、服部龍太郎著『モンゴルの民謡』（開明書院、1977年）にも採録された<sup>39</sup>。歌「青旗」と、1940年代に、新京で発行された同名の新聞紙「フフ・トグ（青旗）」名称由来との関係は不明であるが、ハーフォンガーは、青い旗が、モンゴル民族運動と深い関わりをもつことについて、新聞紙「フフ・トグ」に論説を寄せたことがある<sup>40</sup>。

ハーフォンガーは、1933～1937年の間、興安西省公署（開魯）において、文教関係の仕事をした。その後、満洲国興安局秘書長（1937-1940年）、満洲国駐日本大使館秘書（1941年1月-1943年6月）、満洲国国務院総務庁参事官（1943年7月-1944年9月）、満洲国興安総省公署理事官（1944年10月-1945年8月）などを歴任した。戦後、1945年8

36 前掲忒莫勒「硕果仅存的『東北蒙旗師範学校校刊』創刊号」、40頁。

37 前掲忒莫勒『建国前内蒙古地方報刊考録』、17頁。

38 前掲忒莫勒『建国前内蒙古地方報刊考録』、17頁。

39 前掲Ü・Šuvar-a, *Mongyul ündüsüten-ü orčin üy-e-ün uran jokiyal-un teüke*, 376-384（烏・蘇古拉『蒙古族現代文学史』、376-384頁）。

40 *Köke tuv*、1941年6月21日。

月18日に、ハーフォンガーらは、王爺廟で「内モンゴル人民解放宣言」を行ない、「内モンゴル人民解放委員会」を組織して、内モンゴル人民革命党の活動を始めた。内モンゴル人民革命党東部内モンゴル党部が創設された際、ハーフォンガーは秘書長に任命された。1947年の内モンゴル自治政府の成立時は自治政府副主席となり、文化大革命時迫害され死亡した。

### 三. 『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号の内容

蒙漢合璧『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号には、モンゴル語による文章23部、漢語による文章37部があり、ニュース欄目の内容が一致する以外、それぞれ異なる内容を持つ。モンゴル語の歴史関係の書籍や旗の教育問題に関する論説、小説、翻訳原稿、外モンゴルに関する紹介文、校内ニュースなどの内容が掲載された。上述したように、ハーフォンガーは「創刊の辞」以外に、モンゴル語や漢語で多数の文章を執筆した。

同誌創刊号の執筆者にメルセ（郭道甫）、ヘーシンゲー（克興額）、セレンニマー（色楞呢瑪、筆名何恨蝶）など内モンゴルの近現代史に足跡を残した人物たちが名を連ねた。彼らは東蒙書局、蒙古文化促進会の主なメンバーでもあり、当時東北蒙旗師範学校の教師を務めていた。メルセは上述したように、フルンボイルと内モンゴルにおける政治運動の指導者、教育者として活躍していた。

ヘーシンゲーはマニバダラー（瑪尼巴達喇、1897-1946年）、ボヤンマンダフとともに「資図旗三傑」と呼ばれ<sup>41</sup>、民国時代よりモンゴル語教科書の編纂、印刷、刊行事業に貢献してきたモンゴル知識人である。ホルチン左翼前旗出身で、教育家、政治家、翻訳家として著名な人物であり、1920～40年代にかけて、モンゴル語教科書編纂事業の中心的な存在であった。民国時代、奉天訳書官蒙漢文翻訳官、同旗小学校校長、国会衆議院議員、奉天省署諮議などを経て、蒙旗處翻訳官兼東北蒙旗師範学校教員などを歴任した。1934年頃、満洲国興安南省公署秘書官を務め、1937年以降は民生部編審官室編審官に就任し、満洲国時代のモンゴル語教科書の編纂作業にも多大な影響を及ぼした人物である。例えば、1942年5月に、蒙文編訳館、興安局代表、蒙民厚生会、蒙民裕生会や学生代表などが出席した「蒙古語教授法座談会」が開催された。同会議において、当時興安南省省長のボヤンマンダフは、モンゴル語教授法について、蒙文編訳館ヘーシンゲーの教科書を基準に授業すべきであると、具体的な意見を提案していた<sup>42</sup>。満洲国時代、ボヤンマンダフは、興安東省省長、興安南省省長などを歴任し、政府の中央機関及び地方機関で、モンゴル人

---

41 达瓦敖其尔遺稿「回忆录·玛尼巴达喇（玛鸣周）其人其事」（1995年10月）、『育成学院』遼寧民族出版社、2007年、209頁。

42 *Köke tuv*、1942年6月6日。

に対する行政において中心的な役割を果たしていた人物である。

セレンニマーは、東北大学文学院の卒業生で、東北蒙旗師範学校、奉天第一商業高級中学校などの教員をしていた。『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号に、セレンニマーは何恨蝶の筆名を用いて、漢語で流暢かつ優雅な詩を執筆し、当時のモンゴル知識人の漢文のレベルの高さを示したのである。

上記教員以外の大多数の執筆者は、東北蒙旗師範学校在学生たちであった。例えば、ハーフォンガー、オヨンバト（敖栄寿）、ニマジアルサン（尼瑪扎勒燦）、ワンジル（旺吉勒）、ダワニンボー（達瓦寧布）、袁應麟、何慶凱、韓宝堂、黄成培、王守成、白明遠などがいた。当時、同校は、補習、講習、師範（文系及び理系）の三つの学科に分けられ、補習科は卒業年限1年、講習1級は卒業年限2年、講習2級は卒業年限3年制度を実施していた。講習1級修了後、師範科に進学し、文系や理系のクラスに所属して勉学する。師範科の卒業年限は3年になっているため、同校の師範科の学生たちは最高学年生としての自覚を育てていた。1931年ごろ、同校の学生数は400名を超えていた。ハーフォンガーは当時師範科文系クラスに所属していた。『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号モンゴル語原稿執筆者の大多数はハーフォンガーと同クラスの師範科文系の学生で、同誌漢語原稿執筆者の大多数はハーフォンガーと同科の師範科理系クラスの学生たちである。次の表は、「東北蒙旗師範学校学生名簿」、『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号に基づき、同誌創刊号の題目及び作者を整理したものである。

	作 者	職務／クラス	題 目
モンゴル語版			
①	メルセ（郭道甫）	東北蒙旗師範学校校長	darumal varvahu üges
②	ホルチンの ハーフォンガー	師範科文系クラス 学生自治会会長	darumal varvahu üges
③	同上	同上	sigümji Johiyal öber-ün nom biçig-i bolbasuran surulçay-a
④	ホルチンの ニマジアルサン	不明	sigümji Johiyal jam-i eribesü joqıqu üçüken bodol
⑤	ジャライドの ワンジル	不明	sigümji Johiyal Mongvul qusivud-un ah-a degüü nar tur kičiyenggüyilen sanavulqu hedün jül-ün üge
⑥	ホルチンビントの ヘーシンゲー	東北蒙旗師範学校 モンゴル語教師	iravu nayiravulv-a olan davan sanavulqu yiran üges
⑦	ホルチンビントの ヘーシンゲー	同上	iravu nayiravulv-a terigülegçi čečeg-i silüglegsən anu

	作 者	職務／クラス	題 目
⑧	ホルチンの ハーフォンガー	師範科文系クラス 学生自治会会長	iravu nayiravuly-a olan nüküd tegen kiçilel-iyen bitekei savata kemen ilegegsen silüg
⑨	同上	同上	iravu nayiravuly-a küriyen-u dundaqi kügsin modo
⑩	同上	同上	iravu nayiravuly-a qabur-un edürün sula temdeglel
⑪	フルンボイルの オヨンバト	師範科文系クラス	iravu nayiravuly-a çav-on qayirlal
⑫	ダワニンボー	師範科文系クラス	iravu nayiravuly-a mongvul aq-a degüü nar tavan sanavulqu buu marta kemekü üges
⑬	ホルチンの ニマジャルサン	不明	bav-a üliġer eçüs-ün nigen edürün üliġer
⑭	ホルチンの ハーフォンガー訳	師範科文系クラス 学生自治会会長	tusqai temdeglel sin-e manduqu aimav ündüsüten-ü çinar ba bavuraġu mükükü aimav ündüsüten-ü çinar
⑮	ホルチンの ハーフォンガー	同上	tusqai temdeglel orçilang tu yirtinçü-yin baidal i tobçilan üjegülügen debter
⑯	同上	同上	tusqai temdeglel vadavadu mongvul-un ġaġar oron-u baidal
⑰			tusqai temdeglel köke mongvul-un köke tov kemekü Çinggis-ün üy-e-yin teüke
⑱			sin-e sonosval ökid-un ġisiy-a dur sin-e surugçid nemeġü iregsen anu
⑲			sin-e sonosval uqiyal-un ger i tegsidgen ġasavsan anu
⑳			sin-e sonosval ġiruv biçig-ün ger i ġasaġu davusuvsan anu
㉑			sin-e sonosval tus survavuli dur temeçel sigümġilekü qural negegegsen anu
㉒			sin-e sonosval tus survavuli-yin küġġim-ün bülküm ulus- un qovorondoqi küġġim-ün qural dur orolçavsan anu
㉓	東北蒙旗師範学校 編集部より		duradvaqu üges

	作 者	職務／クラス	題 目
漢文版			
①	袁應麟	師範文系クラス・漢族	勸告蒙族同胞宜極力發展教育宣言
②	杜枝春	講習科3年・漢族	幾句閒談：姑且算是祝詞
③	包福元 (デインホルジヤブ)	師範文系クラス	風沙
④	孟福善	講習科2年講習	青年的心
⑤	何慶凱	師範文系クラス	秋夜対月談話
⑥	騰統文 (ハーフォンガー)	師範文系クラス	我
⑦	同上	同上	読書有感
⑧	同上	同上	菊
⑨	同上	同上	贈慶三老弟並序
⑩	袁應麟	師範文系クラス・漢族	季秋有感
⑪	韓宝堂	師範文系クラス	雁子
⑫	黄成培	師範理系クラス・漢族	偶感
⑬	何恨蝶	東北蒙旗師範学校 モンゴル語教師 (セレンニマー)	春夜有懷
⑭	同上	同上	白裕
⑮	同上	同上	書懷
⑯	同上	同上	其二
⑰	同上	同上	其三
⑱	同上	同上	金縷曲：為一琴弟之南京作
⑲	張錦堂	講習科1年	詠雪兩首
⑳	同上	同上	齋中吟二首
㉑	蘇振九	師範文系クラス・漢族	搗凍子雪
㉒	同上	同上	雪日
㉓	朱恒奮	師範理系クラス・漢族	感懷
㉔	高雲漢	師範理系クラス・漢族	夢之園
㉕	李尚全	師範文系クラス・漢族	菊花評
㉖	郭宗泰	師範文系クラス・漢族	算数遊戯
㉗	蘇振九	師範文系クラス・漢族	文虎候教
㉘	包玉山	師範文系クラス	謎語
㉙	赫貴銘	師範理系クラス	謎語

	作 者	職務／クラス	題 目
⑩	盧鳳翥	師範理系クラス	笑林：洋学生的笑話
⑪	王守成	師範文系クラス	買菜的人
⑫	郭宗泰	師範文系クラス	談叢：我思
⑬	白明遠	師範文系クラス	我不滿意的幾件事
⑭	敖岳山	師範文系クラス (チョグジintai)	張李二生
⑮	盧鳳翥	師範理系クラス	車站的一瞥
⑯	吳相文	師範理系クラス	给朋友的一封信
⑰			新聞： 盪漱室工竣 女子班又增学生 図書館將成立 本校辯論會志盛 本校歌詠団參加國際音樂會

『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号に掲載された文章は、モンゴル問題、民族の運命や未来、民族文化、復興の方法及び道のりなどについて議論を重ねていた。忒莫勒氏による先行研究では同誌に掲載された一部の文章内容について考察を行ったため<sup>43</sup>、本稿では省略する。ここで同誌掲載内容について一つ補足すると、ハーフォンガー訳「新興民族与衰亡民族的性質与区別」（新興民族と衰亡民族の特質及び区別）という文章は、新しく発見された氏の翻訳作品である。序言によれば、本文は漢語による著作『各国民族性』（各国の民族性）の関係ある章節の一部分を訳したものだという。

この『各国民族性』は、張世安が著し、1930年5月上海華通書局より出版された書である。ハーフォンガーは民族性、特に「新興民族」及び「衰退民族」に関する節をモンゴル語に抄訳したのである。民族性（nationality）、民族主義（nationalism）、国民国家（nation-state）等は西ヨーロッパより起源する概念で、20世紀初期より中国の知識人たちの注目を浴びていた。張世安著『各国民族性』は民族性に関する当時の研究成果を体系的に紹介・整理したもので、著者はこの議題に関して中国の各地の大学で講演を行っていたという<sup>44</sup>。

上記の著作には、各国の民族性を「新興民族」と「衰退民族」に二分し、「新興民族」にドイツ、イギリス、アメリカ、フランス、ソ連、イタリア、日本等の国名を挙げ、その民族性は情熱的で、強靱な神経を持ち、組織性や創造性に富む一方信仰深い、自尊博愛

43 前掲忒莫勒「硕果仅存的『東北蒙旗師範学校校刊』創刊号」、40-41頁。

44 張世安「第一篇 序論」、『各国民族性』上海華通書局、1930年5月、4頁。

平等を敬うと述べた。「衰退民族」にエジプト、ギリシャ、スペイン、インド等の国名を挙げ、精神薄弱、疑り深い、不潔や無秩序などを民族性として挙げた。最後に、著者は、「中華民族は新興民族に向かうのか、衰退民族になるのか、我が民族自決によるものであろう」と締めくくっている。

ハーフォンガーは「民族性」に関する上記内容に注目し、「第四篇 結論」の部分の抄訳し13頁に及ぶ訳文 Sin-e manduqu aimav ündüsüten-ü činar ba bayuražu mükükü aimav ündüsüten-ü činar を掲載した<sup>45</sup>。この文章は、当時のモンゴル人学生や知識人たちの漢人知識圏への関心を示した一方、自民族の未来の行方に対する憂慮を表した一つの事例であると言えよう。

このように、東北蒙旗師範学校は、ハーフォンガーをはじめとする多数の卒業生を送り出したが、彼らは満洲国時代にモンゴル人官僚として任用された。そして、ヘーシンゲーをはじめとする同校の教員らは、満洲国時代のモンゴル人に対する文化・教育活動において、中心的な役割を果たしていくことになるのである<sup>46</sup>。

## おわりに

中華民国政府は、近代多民族国家の形成・定着の過程で、「五族共和」による国民統合という課題を抱え、対モンゴル人諸政策を実施した。しかし、清末から南京の国民政府設立までの軍閥混戦を背景として、中央政府と地方政権の対モンゴル政策は一貫性を持っておらず、モンゴル人に対する文化と教育事業は、基本的に各地方政権とモンゴル人との交渉の中で行われていた。

同時期の内モンゴルの王公や知識人たちの動きに目を向けると、彼らは、内モンゴルと外モンゴル以外にも、北京、南京、瀋陽、吉林などの各地を拠点に、政治、経済、文化、教育をはじめ様々な活動・運動の展開を模索していた。これを背景として、モンゴル人を主体とする文化と教育団体は、相互に連携して、活発な活動を行っていた。

しかし、モンゴル人の力だけでは、強力な活動を展開するのが難しく、各地方政権と取引を行わざるを得なかった。東蒙書局、蒙古文化促進会及び東北蒙旗師範学校の活動は、その典型的な事例である。東蒙書局は、1920年代から1932年まで、瀋陽のモンゴル人たちの活動の中心的役割を果たし、蒙古文化促進会の尽力により、東北蒙旗師範学校が建てられた。同校は、ハーフォンガーなど多数の卒業生を送り出し、彼らは満洲国時代にモンゴル人官僚として任用された。そして、ヘーシンゲーをはじめとする同校の教員らは、満

---

45 『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号、40-52頁。

46 詳しく、娜荷芽「1930～40年代の内モンゴル東部におけるモンゴル人の活動」『日本とモンゴル』第49巻第2号（130号）、2015年3月、108-119頁。

洲国時代の対モンゴル人文化・教育活動に中心的な役割を果たしていた。

1930～40年代の内モンゴル地域には中等教育機関が二十数校あって、これらの学校は学報や機関誌を発行していたが、『東北蒙旗師範学校専刊』創刊号は現在まで発見された中華民国期刊行の最初のモンゴル語による学報である。同誌の執筆者は主に東北蒙旗師範学校教員や師範科の在學生たちであり、モンゴル問題、民族の運命や未来、民族文化、復興の方法及び道りなどについて活発な議論を行っていた。

キーワード 中華民国期、東北蒙旗師範学校、『東北蒙旗師範学校専刊』